EurekaXIV

六年制通信　№7　令和８年５月22日（金）号

関心が知識のもと

遠藤周作や開高健の対談集を読んでいると、何とまぁ何でもよく知っていることよと、その知識量に驚かされますが、同時に彼らの知的好奇心というか未知の物事に対する関心の深さと言いますか、むしろそちらの方に感動します。有難いことに、私は学生時代に知識の豊富な先生方にたくさん出会ってきました。先生方はご自分の専門で一流の業績をお持ちの上、文化文明全般、ということは人間の営みの森羅万象に深い教養と絶えることのない関心を持ち続けておられました。ですから先生方の雑談についていけないことが何度もありました。雑談を解する知識がこちらにないわけですから。中でも印象に残っているのが南方熊楠をこよなく敬愛されておられた先生で、当時フォークロア（民俗学）に一番興味があると言っておられました。つまり、先生の前には万巻の書を読んでなお終わりのない学問の世界が待っているということです。先生がどれほどの知識を欲しておられるのか、見当もつきませんでした。いずれにしても文学の世界において、物語の世界において古今東西の深い知識をお持ちの先生方に憧れたものです。今の私は、先生方が「面白いね」と挙げられた本をいつか自分も面白く読めるようになりたいと棒ほど願って針ほど叶った、というところでしょうか。

現代のような情報過多の時代においては、雑多な取るに足らない情報が絶えず飛び込んできますから、正確な知識を得るのが昔よりもかえって難しいのかもしれませんね。考えてみれば、知識を得るのが容易ではなかった頃、テレビはもちろん活字文化も発達していない大昔は、知識を支えるものは経験しかなかったのではないでしょうか。したがって、年寄りの知恵というのは大事にされたのだと思います。長く生きているのだから様々な経験を重ねている、従って知識も知恵もあるという理屈ですね。活字文化になると、本を読む者と読まない者の知識の差は、これはもう絶望的な開きができたと思います。ですから本を読む集団は知識階級などと呼ばれ、エリート扱いされるわけですね。しかし、テレビなどのメディア文化が生まれると、誰もが気軽に同じ知識（ほとんどが表面的な浅い知識ではあるにしても）を得ることが出来るようになりました。本だと文字ですがテレビだと映像ですから、ただ受け身でいるだけでも文字よりもはっきりとした共通の知識が私たちに与えられるわけです。サハラ砂漠の広大さや南十字星の美しさをどれほど活字で読んでも、映像が与えるものに比べようもないですものね。百聞は一見に如かずとはよく言ったものです。

もちろん、テレビを観ていれば自分の望む知識が全て与えられるわけではないですが、映像を超える知識を求める意欲がないとテレビやラジオといった情報源だけで満

足してしまうかもしれませんね。やはりもっと深い知識、正確な知識を君たちには求めてほしいと思います。それには自分の関心を深めることです。

話は少しそれますが、今は原油の高騰で様々な製品が値上がりしていますね。ポテトチップスの袋がカラー印刷から白黒になるそうな。美味しそうに見えないかも。こんな些末なことがメディアでは結構話題になっているようです。私は、こういう話を聞くたびにいつも思うことがあります。君たちは、ひょっとして歴史の時間に習ったかもしれませんが、今からおよそ 50 年前、「ワーク・ライフ・バランス」という言葉もなかったころ、君たちの祖父母が若かった時代のことです。あの時代、懸命に働いた人々の夢は何だったか知っていますか。彼らの夢は 3C を持つことと言われていました。わかりますか、3C。「カラーテレビ、車、クーラー」のことです。これらを持つことが本当に「夢」だったのですよ。ということは、私たちは祖父たちの世代が「夢」に描いた生活を、今当たり前のように享受しているのです。私は、従って、物質的なことで多少の不便やあるいは後退に思えるようなことがあっても、夢の生活をしている幸せを忘れてはいけないと思っています。ですから、君たちには物質的なことではなく精神を、心を満足させることを意識して生きようと思ってほしいのです。そのためにも正しい知識をたくさん求めて下さい。

初めから幅広い領域に関心を持つことは難しいと思います。何か一つ、非常にマニアックな対象でいいので「専門」的に知っている領域を持つことをお勧めします。その専門が次々に未知の疑問を運んでくれ、新たな関心を生み出してくれますよ。

今週のおすすめ

・仁科裕貴　　『こちらはただの「落し物係」です！』　（潮文庫）

この人、元公安の警察官です。ですから警察内部のことは詳しく記述も正確なわけです。ところで皆さんは「サイコメトリー」という架空の能力を知っていますか。人や物に触った時、そこに宿っていた過去の出来事などの映像が浮かんでくると言う能力。例えば、落とし物として届けられた古びた茶碗に触れた途端、その茶碗から見た映像として若い女が頬に傷のある男に首を絞められているような場面が浮かんでくるといった…。とある警察署の落とし物係音無遠子にはこの能力があってと、そんな設定でこの元公安警察官は推理小説を書いたのでした。まずまず面白いですが、文章そのものもリズムも若い気がしました。洗練されていないと言いますか…。

今回はもう一冊、今野敏の『機捜 235』（光文社文庫）もどうぞ。機動捜査隊というのは事件があった時いち早く現場に駆けつけ証拠の保全などを行うようです。その後は捜査一課の刑事たちが事件を追うわけですね。結構警察も棲み分けができているようで。ところが、機動捜査隊所属の高丸の相棒として定年間近の縞長が着任して以来、高丸の心に変化が出てきます。警察官としての仕事をするのに所属は関係ないと思うようになるのですね。この、いわば「仕事をはみ出す」ことは本当に若者の成長につながると思います。自分の仕事の範囲を自分で決めてしまう若者を見ると悲しいですね。

BGM は　手嶌葵 の *星明りのトロイメライ*　でした…。